医学生の海外臨床実習プログラム

－ 研究方法の検討－

小西 由樹子 (早稲田大学 大学院)
今福 輪太郎 (岐阜大学 医学系研究科)
西城 卓也 (岐阜大学 医学系研究科)

キーワード: グローバルリーダーシップ、短期海外経験、モチベーション、異文化適応

1. 研究の目的と現状の課題

近年、医療分野でも国際的に活躍できる人材に対する必要性が高まっている。外国人患者や海外との共同研究の増加に伴い、医療英語やグローバルな感覚を保有することが求められている。そして、多くの大学が、参加者の異文化適応力の育成だけでなく、医療従事者としての職業能力向上にも有効だと考え、短期海外臨床実習プログラム（以下、海外実習）を設置している（医学教育振興財団, 2013）。海外実習の参加者は医学部の主に5, 6年生であり、通常は大学付属病院で外来もしくは病棟実習を行っている。海外実習の内容は、1ヶ月から数ヶ月間、海外の医療機関の指導医の下で医療チームの一員として患者診察に従事するものである。また、海外実習の申し込みは参加者自身が派遣先の病院を探して各自で申し込む。この理由は、自国以外の臨床実習に参加することが、

国際経営分野においてグローバルリーダーシップに関する理論的及び実証的研究は数多い。海外駐在員に関する研究分野では、自分の意思で海外駐在を決める Self-initiated expatriates (SIEs)に着目した研究も増えている（Noeleen et. al, 2011, Tharenou & Caulfield, 2010）。これら文献では、自ら海外赴任を志願した SIEsの方が、所属組織から指名された海外駐在員よりも、異文化適応力が高く、駐在地で成功する可能性が高いと述べている。一方で、海外留学など個人的な海外経験を分析する研究も多い。これら文献では、個人的な海外経験が将来の国際的な仕事をする際の能力に貢献すると述べているものが多い。しかし、これら2つの海外経験の中間である仕事に関連した海外留学（海外実習）を分析対象とした研究は少ない。

本研究の最終的な目的は、自発的に海外実習に参加した医学生が、異文化適応力と職業能力を向上するかどうかを明らかにすることである。しかし、本発表では、研究の最初のステップとして、海外実習出発前に行った22名のインタビューを元に、海外実習参加者のモチベーションを明らかにする

この分析結果から以下の効果が期待できる。まず学術的な貢献としては SIEs と海外留学のモチベーション理論をつなぎ、海外に出る個人のモチベーション理解を深めることができる。実務な貢献としては、参加者のモチベーションを理解することによって、より効果的・魅力的な海外実習プログラム作成につながる可能性がある。

2. 先行文献レビュー

SIEs のモチベーション

自分の意思で海外駐在に行く SIEs のモチベーションは、組織の任命で行く海外駐在員のものよりも幅広いと指摘されている。Froese (2012)は、国際的な経験への志望、魅力的な労働条件、赴任地と関係のある家族、赴任地の労働市場（就職のしやすさ）が動機付けだと述べている。Chen et al. (2010)は Cultural Intelligence (CQ) の5項目のうち動機づけ CQ 尺度をモチベーションとして使用している。この動機づけ CQ の中には、自己効力感と内的動機の尺度が含まれている（Ang et al., 2007）。Inkson et al. (1997)は上記以外に、好奇心、新たなことを学びたいという欲求、過去・現在の状況からの逃避などを挙げている。

大学生の海外留学参加の意思決定要因

海外留学のモチベーションは、経営学や教育学で多く研究されている。これら先行文献の多くは質問紙を用いた学生の意識調査をもとに、海外留学参加の意思決定要因を分析している。松原ら（2008）は、学生が所属している学部、親が留学に賛成しているか、留学先に親戚や知人がいることが、留学参加に影響していることを示した。船津ら（2004）は、（1）過去に短期間でも海外経験がある、（2）卒業後に留学する志望がある、（3）卒業後の所得に対してそれほど強気でない場合に、学生の海外留学に対するモチベーションが高くなると述べている。Pope ら（2014）はアメリカの大学生を対象に、海外留学に対するモチベーションは、自己成長欲求、過去の海外経験、参加者の年齢が関係することを示した。これら先行文献を踏まえて発表者（小西，2017）は、大学生の短期海外留学意思決定要因を分析し、留学参加へのモチベーションは、「留学そのものが魅力的であること」、「語学力の向上」、「新しい文化を経験できること」、「自分を困難な状況下に置いて成長させること」、「身近に留学経験者がいること」、「大学主催で同行者もいる安心感があること」と過去の海外経験が影響していることを示した。

3. 調査方法

この調査は、インタビューを用いた定性的方法を用いた。なぜなら、医学生の海外実習という仕事に関連した留学に対するモチベーションに関して、先行文献がなく、探索型の調査が適切と考えたからである。将来は本調査の結果をもとに、質問項目を選定して定量的な分析につなげることを検討している。

サンプルとデータ収集

海外実習参加前の2016年12月から2017年1月までに22名の海外実習参加者にインタビューを行った。サンプルプールは、2017年に海外実習に参加する医学生である。インタビューは、半構造化インタビューガイドラインに沿って行い、回答者の発言に関係があると考えられる更なるトピックの探索も可能にした。一連の質問は海外実習参加のモチベーションについて行った。具体的な質問は、なぜ彼（女）らが海外実習に参加する意思決定をしたのか、またその意思決定をするまでの過程、海外実習で達成したいこと、不安に思っていることなどについて幅広いものであった。

全体のサンプルは男性14名、女性8名から成り、年齢は23歳から25歳である。参加者の詳細は表1に記載している。

(表1)調査協力者の構成

性別	年齢	配偶者の有無
男:14人	23歳:11人	有:0人
女:8人	24歳:7人	無:22人
	25歳:1人	
	申告なし:3人	

データ分析

インタビューは全て録音し、後日全発言を文字化した。グループインタビューの詳細は表2の通りである。データ分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を使用した（木下,2003）。

(表2)グループインタビューの構成

協力者ID	インタビュー時間
1,2,3	20分
4,5,6,7,8,9	38分
10,11,12,13,14	48分
15,16,17	28分
18,19,20,21,22	26分

3. 分析結果

医学生の海外実習参加のモチベーションとして8要因が抽出された。具体的には、件数の多いもの順に、「海外実習の参加しやすさ・安心感（29件）」「異文化・海外を体験したい（24件）」「自分の能力（語学力・専門知

識とスキル)の向上(20件)」「自分の能力の向上(20件)」「将来のキャリアに役立つ(11件)」「過去の海外経験の影響(10件)」「自己成長(8件)」「家族の賛同(4件)」「英語を使いたい(2件)」だった(表3)。

(表3)医学生の海外実習参加のモチベーション

カテゴリー	件数	内訳	件数
海外実習の参加しやすさ・安心感	29	先輩が同じ実習先に行っていた	11
		同じ実習先に行く知り合いがいる	6
		実習先から比較的容易に許可が下りる	8
		学生として実習を受けるので責任が軽い	4
異文化・海外を体験したい	24	異文化・海外を体験したい	16
		観光をしたい	6
		海外留学したかった	2
自分の能力の向上	20	語学力の向上	9
		医学の知識・スキルの向上	8
		実習で専門能力を身につけられる	3
将来のキャリアに役立つ	11	将来のキャリアに役立つ体験ができる	8
		将来は海外で働きたい	3
過去の海外経験の影響	10	過去の海外経験が影響している	10
自己成長	8	今とは違う自分になりたい	5
		新たな環境で自分を試してみたい	3
家族の賛同	4	親が賛成・許可してくれた	4
母国語を使って仕事をしたい	2	得意の言語を使う機会が欲しい	2

(注)調査協力者の多くが複数のモチベーションを発言したため、合計件数はサンプル数よりも多くなっている。

紙幅の都合上、最も発言件数の多かったのは「海外実習の参加しやすさ・安心感」だけ説明を追加する。「参加しやすさ」の内容としては応募要件に英語力試験が含まれていなかったり、〆切が遅かったり、競争率が低かったりと、比較的容易に海外実習参加許可が下りやすいことが含まれていた。「安心感」には、知っている先輩が過去に行っていた海外実習先だと、どういう内容なのかを直接話が聞けるため、Webページを読むだけよりも安心だという発言や、同じ実習先に知り合いと一緒に行くので1人で行くより安心だという意見があった。

4. 考察

医学生の海外実習参加のモチベーションをSIEsのモチベーションと比較すると、SIEsのモチベーションのうち「国際的な経験への志望、魅力的な労働条件、赴任地の労働市場(就職のしやすさ)、内的動機、好奇心、新たなことを学びたいという欲求」は医学生でも同様のものが確認できた。しかし、一方で、「赴任地と関係のある家族、自己効力感、過去・現在の状況からの逃避」の3つは医学生ではみられなかった。

次に、医学生の海外実習参加のモチベーションを海外留学のモチベーションと比較すると、海外留学のモチベーションのうち「親が留学に賛成している、留学先に親戚や知人がいる、過去に短期間でも海外経験があること、卒業後に留学する志望があること、留学そ

のものが魅力的であること、語学力の向上、新しい文化を経験できること、自分を困難な状況下に置いて成長させること、身近に留学経験者がいること、大学主催で同行者もいる安心感があること」は医学生でも同様のものが確認できた。しかし、一方で、海外留学のモチベーションのうち「卒業後の所得に対してそれほど強気でないこと」は医学生ではみられなかった。

上記の3つのモチベーションの相違点から、以下のことが考えられる。1つ目は、医学生海外実習参加のモチベーションは、個人的な海外留学の参加モチベーションと海外駐在へのモチベーションの両方と重なる部分が多いことである。2つ目は、医学生海外実習参加のモチベーションには、海外留学や海外駐在へのモチベーションで見られた「過去・現状からの逃避」や、現状を悲観的に見ている「卒業後の所得に対してそれほど強気でないこと」は確認できなかった。一方で、医学生海外実習参加のモチベーションで「海外実習の参加しやすさ・安心感」が最も顕著だった。この2つを合わせて考えると、医学生は自身のキャリアの現状に満足しており、海外実習は将来のキャリアをさらに有利にする可能性のある1つのオプションだと考えている可能性がある。そのため、将来のキャリアを損なうリスクのある海外実習先を選択するよりも、安全で許可が下りやすく、身近な先輩が過去に行っている「安心な」実習先を志望している可能性がある。

謝辞

本研究は科研費（基盤研究(C)17K03968）の助成を受けたものである。

参考文献

- Ang, S., Van Dyne, L., Koh, C., Ng, K. Y., Templer, K. J., Tay, C., & Chandrasekar, N. A. (2007). Cultural intelligence: Its measurement and effects on cultural judgment and decision making, cultural adaptation and task performance. *Management and organization review*, 3(3), 335-371.
- Chen, G., Kirkman, B. L., Kim, K., Farh, C. I., & Tangirala, S. (2010). When does cross-cultural motivation enhance expatriate effectiveness? A multilevel investigation of the moderating roles of subsidiary support and cultural distance. *Academy of Management Journal*, 53(5), 1110-1130.
- Froese, F. J. (2012). Motivation and adjustment of self-initiated expatriates: the case of expatriate academics in South Korea. *The International Journal of Human Resource Management*, 23(6), 1095-1112.
- Inkson, K., Arthur, M. B., Pringle, J., & Barry, S. (1997). Expatriate assignment versus overseas experience: Contrasting models of international human resource development. *Journal of world business*, 32(4), 351-368.
- Noeleen Doherty, Michael Dickmann & Timothy Mills (2011) Exploring the motives of company-backed and self-initiated expatriates, *The International Journal of Human Resource Management*, 22:03, 595-611
- Pope, J. A., Sánchez, C. M., Lehnert, K., & Schmid, A. S. (2014). Why do gen Y students study abroad? Individual growth and the intent to study abroad. *Journal of Teaching in International Business*, 25 (2), 97-118.
- Tharenou, P., & Caulfield, N. (2010). Will I stay or will I go? Explaining repatriation by self-initiated expatriates. *Academy of Management Journal*, 53(5), 1009-1028.
- 木下康仁、『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』、弘文堂、2003年
- 小西由樹子、「短期留学を通じた自己効力感の向上ー参加大学生のインタビューを用いた質的調査ー」『早稲田国際経営研究』、48号、2017年、17-26頁、早稲田大学
- 船津秀樹、堀田泰司、「海外留学に関する意思決定問題」『商学討究』55(1)号、2004年、89-108頁、小樽商科大学
- 松原敏浩、薛曉梅、李晨、姜輝、「大学生の留学意思決定に及ぼす要因の分析(2)-日本の大学生と中国の大学生の比較を通して」、『経営管理研究所紀要』15号、2008年、87-99頁、愛知学院大学

URL:

医学教育振興財団(2013)「グローバルな感覚を備えた医療人の養成をめざして」
(<http://www.igakubujuken.jp/column/detail.php?column=27>) 2017年5月22日アクセス